平將門退治圖會八

へ13
3296
8

平将門退治圖會七

起天慶四年二月
至同年五月

第九十七 満仲黒崎の城攻
附 伊賀寿次郎戦死

経に曰。國家将に興らんとする則ハ必禎祥ありといへども是禎祥のことにあらじ。良将智将交會して。父祖の威名職にその輿に於てその徳澤大ぬ天下に布に及び。億兆自ら従状を抑左馬助満仲ハ。経基王の嫡子として清和源氏の嫡流なり。寛仁大度にして武略ハ父祖に超あひ鋭を摧き堅きを破る。猛勇のことにあらず馬の藝その蘊奥を究めてバ世挙てその威に伏し。武家の棟梁とぞ称しける。斯て此年天慶四年官軍宇佐の城にあり。宰府黒崎の要城を攻らるべしとその評定数回ありて

大正十年八月九日 寄贈 本大學出版部

へ 13 門 3296 8

りんだ九州大半賊徒の為に焼亡して官軍の衣を通ずるのみなりたるのみ所々の海岸
津々浦々新関を構えて兵糧の運送を妨げ及べ。諸将評議の折ふし。春二月
十六日。筑後の国柳川城より飛脚到着して言て曰く。黒湯宰府の強賊等。
ますます逆威を振ひ。備中退治延引せべいのく大事に及べし。然るに不日かの
表城へ出発向致すべし。公頼後詰仕らんとそ。その沙汰と微細に逸く表上しうし
べ表将斜めならず悦びあひさらば進発あるべしとそまづ其隊分て宣らるる。野朝
隆好古六孫王経基の二方三千騎を率て敵の本城太宰府の前後より圍る
べ。また馬助満仲の二方五千騎を率て黒湯の城へ向うべしとそ。同月十九日発
向あるべ。好古経基の両将の同月廿一日に筑後の秋月に着あり。このほど諸方に
関えるべ官軍に屈せんと。国々の凶賊黒湯の如くに方騎
も除うるべ。斯て賊徒の中に諸卒勇武の者ども

まこと抑りより飛脚来り大貳公頼暴に病て今朝病死仕り此長月筑後に陣れ
ども。最老命限りあり。ここに於て當家の兵義しかるに既に表将発向
ありその自然の差ひわせんとて早く陣進し。演さしうべき将に是を受て
怒陽あり。何さま諸卒喪に服軍とん。と然るべくこそ。供養作善を第一に嘗て中
さうべしと有て。ここに関に使者を副てその旨を慰らる。大宰大貳公頼の年徒而表
将再評定あり。好古朝隆に兼て一の大将軍さるべくそその勢三万騎
騎を率て宰府の大路へ向うべしとそ。久留米より唐津路を回り。博多の津へ打て
出る。六孫王に相模守に成べ。大将の勢の廻る間猶秋月に滞留
あり。斯て馬助満仲に同月廿一日に豊前の国柳ヶ浦に陣し。其折ふし
二百余艘の兵船を連ね。流前国宗像大宮司政連に味方に参り。馬助満仲
喜悦斜めならず。速に対面あり。是より催促せしめんと欲す。処に平遠の来

著滿足を思ふなり。則ち今八月廿二日。辰の一點と覺あり。是ハ〻驚いて水練を。
熟習するのと覺ゆ。其夜真の源をとり向ふべしとその夜義経宣あらば。徒而其
夜も明離れて多分の順ゆもありしを。黒海城の四方より。水陸一面に旗を進め。
門を作り。鬨を蒐さしめ。城兵五百騎許を門より。颯と蒐り。
群がる寄手の真中へ。倉新もあく割て入り。縦横に蒐立る。寄手ハ門を作り
ろみ。五百騎許を取籠く。一人も騎すなと。法と掘へ矢石を飛し。南風に風責
戦ふ。ふ敵と敵味方の。疲員死人数を考へ。汗血砂路に流し流す。
斯て城会へ敵と。討ゐ。さて吾先中。城中さて北艘ろ。高櫓より見て
見て甲冑受ふ敵味方の。鋒動ふ。ゆ。一軍して軍兵等ゲ眠気を醒さ。
と。伊賀寿次郎八尺腹りの藏の棒を。ひと。腰くこ〻揺て。勝鬨する寄手の
陣へ。真一文字に蒐入りて。かの藏棒を。麻売の如く。振ひ。打伏せ。

滅多打れ打倒せ。寄軍さ中も勇みとの。この藏棒ふ中るもの。何人ハ仆て脇ふべ
き時の間ふ二十八騎。打倒さまて即死もあり。又ハ腕脛を打折まて。半生死もの
あり。実ふ比類なき伊賀寿ゲ働き。敵も味方も唖とのみて。寄時近づくのもを。
粤ふ去年この城へ援懸るとく名を顕しる。遠山左衛門二郎宗持。夫と方より
望む敵ぞと。諸徒と合せ花で来り。先刻より助奉まべ伊賀寿教のかん働き
実ふ人間所為とハ覚ぬ。暫時そまして休息ゐま。他ふ
餐癒ふのみけまで。矢一筋も参らせんとそ。人濱の丸木の石の。法螺吹くく。働
ゐさり。伊賀寿ハ関て。宣突。たハと易き所望ゐり。足下等如ゐ。放つ矢の
たとへ数千ゐ来るとも。衰撥まこハよりもあ。望この所ゐ射ゆ。その藏棒を
杖ゐ突扇ひて。法ひるゲ。空嘯て在れまべ。宗持ゐて敵の廣言憎さも
憎しと。法ゐ矢筈番きりくと引絞り。兵弗と切て放つ。思ふ矢所ハ差ねど

澄の礼やよりもけん裏掻とのうりしうべ宗持は弓紙筈ち矢継早ふふ筋すで殿矢ことと射ふまとど何まふ裏を掻ざまべ伊賀寿次郎冷笑ひ
ふふ何かでも同ドて。五番ゆう指ゆへこ飾まを廣云てなまべ宗持いらぐ
見ぐうべ。まこ矢を番ひきりくと引絞らんとする折ゆう何ゆうふけんちれ弦弟と
切まを番ひゆう矢い空く瓦落理と墮伊賀寿いとと見て紙もとをあれゆう
足下ゆ運命も。今ふ限まうとのひふも果ずふ又陽りの大刀抜翳しま塵ふ
あまとと打くかるゆ心得うゆと遠山いゆの赤弭ふて受流ー。太刀をもらはまと
抜放ちて一上一下と切結ぶ互ふ劣らぬ練とふ練武ひへ退き武ひへ進を。
花雲不花雲人交もせべ火花を散らを。奮撃突戦。敵も味方も馬を控へ
戦ひ紙止て見物ゆ。干時伊賀寿ゆ矢を平め。宗持ゆ馬の弟を。破廉恥
と羅ゆ宗持い馬上ふまゆまで落けゆ。元来乳早き雄さまべ落さふふ

伊賀寿次郎ゆ。晩のふ逃を薄はよ破よと。あまうふ打けゆ。遠山宗持ゆ
佩ゆ太刀ハ石丸と号てこ双の業物。鍔石紙さへ切裂ゆ。名誉の飯たゆ
ゆまべ。伊賀寿い真甲ゆち割らを。脇ゆ所をふを伸ー。馬より破廉恥と
引部ー。組倒して首を搔。太刀の先へ貫きて。鬼神と闘元ー。伊賀寿次郎
拾遠山ハ清宗持。只今ことをとよを討取ゆと大音聲ふ名ゆうけゆハ。
勇まーゆうけゆ在さふゆう。こふ去ま元年遠山諸俱授懸ゆうし交野義太郎
時澄も。この陣中ふ在て今朝ゆう。蘭の山のふふ在けゆゆ。遠山伊賀寿と
戦ふゆ。風ふ関て花で来ゆふ。ゆや遠山ゆち勝て陣中へ引ゆ入ゆ。いとい意
ゆふ思へゆ。宗を討ま元の伊賀寿ゆ。備討ゆゆゆ。ゆゆ。滅ゆ見結ゆ在
けゆゆ。伊賀寿太郎の一子ゆて。十七ゆふゆゆ冠者。叔父の敵遠ゆゆ馬を
早めて駈来ゆ。時澄ゆと。ゆと搦違ひゆ。ゆゆと組て内甲を。ゆゆ。ゆ年

ゐ。是郷の小冠者何せんとそろ杖ゐ丈だろう拙しゑ。郎堂馳寄く
走生半死の是て角へ引うけて城中へぞ入ゐける。伊賀寿太郎い拍鋒とも憑と
切さる沖て討せ。まこ二子て拙分らと死生も和と忍家勢ゐ。ぞろ雲時も猶後ゐ。
馬ゐうもく乎駆ゐ。是伊賀寿討すゐ。大将純素ゐ下知ゐ。偽系精鋭の
勢千二百騎。一同ゐ駆出ゐ。寄ゐもこと懸合せ。遣つ捲つ戦ひ。ぞ名武目
ゐ及びゐ丈ゐ五ゐ陣を引揚て。その日は軍ゐ果ゐり

第廿八　純素和睦を乞ふ

附　満仲計策純素を討

再説寄ゐい苑ゐと入智。弼計て設て黒淵の城を攻るゐ。ゐ急ゐ。
城中もまこ機ゐ隙と変ゐ乗ゐて防ぐゐ。ぞ。三月廿日ゐ。三月十日ゐ至る
まで。益疲の合戦止時ゐく。敵味方の疲員死人数百人とゐ数知ゐ。

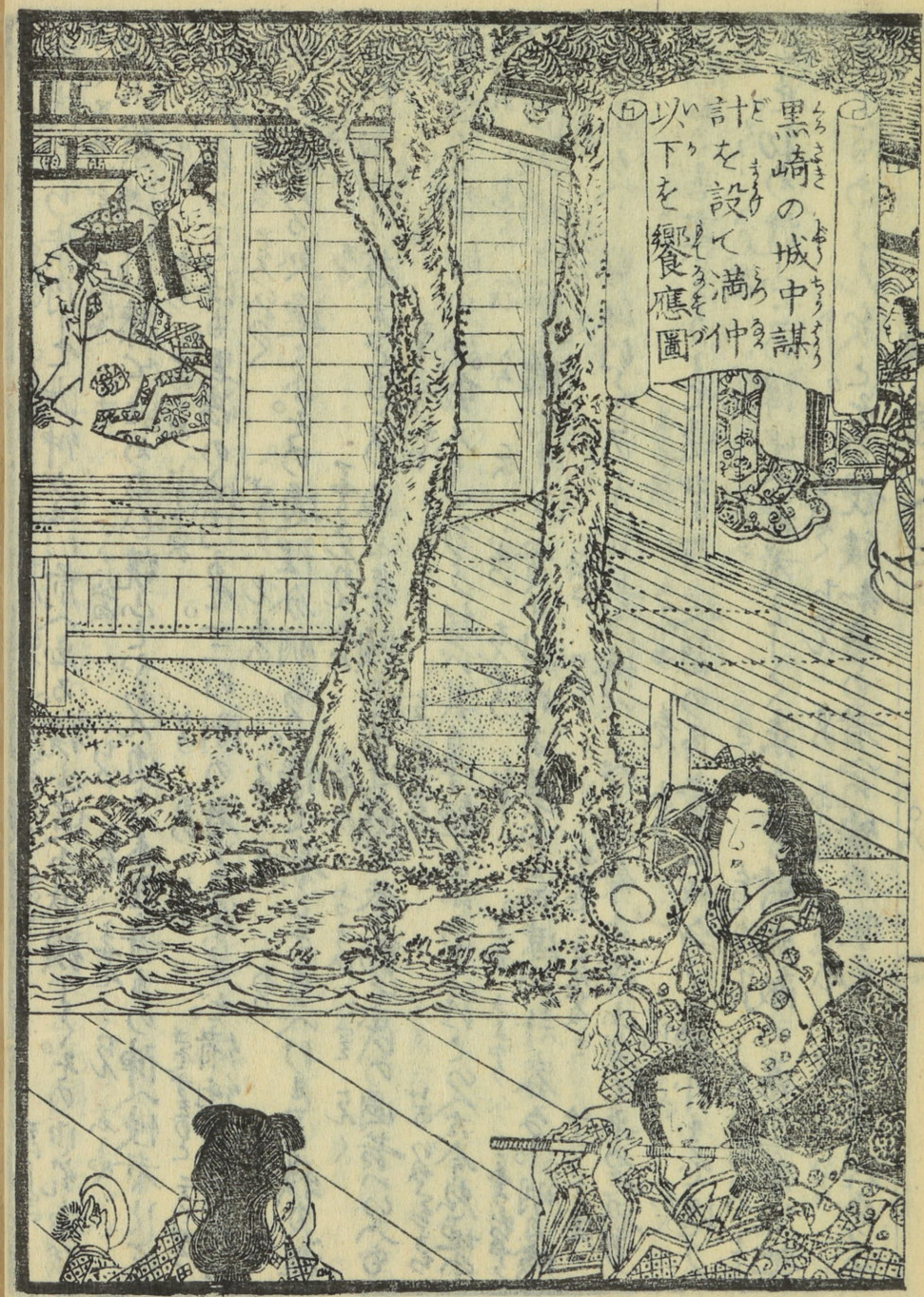
さまざまの寄ゐい諸国の勢。日く疲ゐ駆加ゐ。始め一万ゐ千騎淵と聞えしも。
三月十一日の暮倒ゐ。四万六千七百騎ぞ注しける。数ゐ軍兵充満しく。野
山とゐ丈ゐ。東西南方二三里ゐ其間ゐ。実ゐ皆のみを打る如く。敵戦尾死の
列紛て。種くの旗幟りゐと眼覚しくぞ見えける。ゐまこ城中ゐ籠て
籠城の準備厳重ゐて兵粮矢種澤山ゐ敵て大敵中ゐ怒ゐ色ゐく。
防禦の備へ所ゐ。連日の戦ひゐ。人馬とゐ労ゐ。ぞ一日軍を
止めて。その労ゐ休めんとて。城中ゐ作候て居ゐ。寄ゐい遠籌て樊家対や
入ゐく。疲廻り厳重ゐ馳回ゐ。その後ゐ兵ゐ惟幕て。寄ゐく。数日ゐ労て怠ゐ
けゐ。ゐ稽亮純素ゐ。腹心ゐ郎堂ゐ。元綱ゐの者ゐ。浸へて
加藤兵衛尉重光ゐ。陣頭へ来りく。案内と乞面謁せんと願望む取次斯と
言入ゐ。重光大ゐ不審て。疲陰ゐ及び何号ゐ使者ぞ。ゐ此方へ通ま

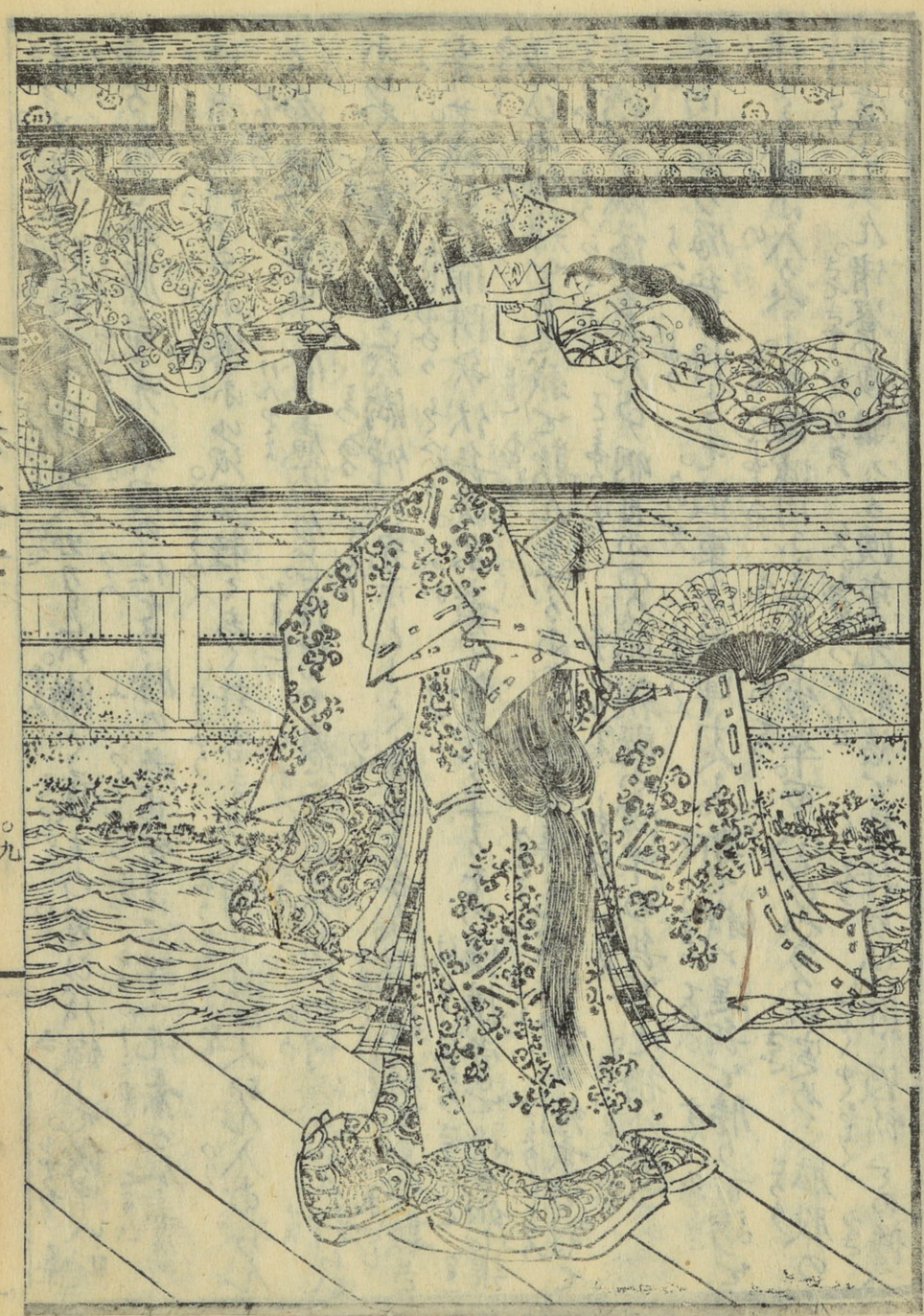
べくして頓て一間なる所に清水雪先出迎つく色代終り。境山程で上言すやう。某家法に陣中へ推参なる縁由に別の仔細に入れ主人権亮純素朝家へ對し聊か憾を奉る仔細とは。全く黙心と存ざるの処。兄純友ら情に強て骨肉同胞の義まで捨ずて。怨敵とのみ此年来朝家へ對し恐くも弓矢を向ひしは。熟罪責を慮まで。天誅いよく恐とありて。於て心を強し。宰府なる純友を斬て。朝家に落り高さんと。情こそ常所に引別と時節を計りて弓矢を取身の習ひとて。止事を得ば法樂成て盡し。官軍多く疲傷ふと。聞するに。打続る合戦に純素が寸志を深るに同じく。心なくむも黙止せず。今日迄くの暇障を得て日来の義情を速に云上する時。幸りに頼ふに大将軍寛仁大度の。寛懐を蒙ひく。是まで罪責を恩免ゆく速に官軍に降り。兵籠忠戦成抽でく。不日に

兄純友を誅戮し。誠心を彰し。高き恵を。此條かくも偏なりつ。兵天の照覧に。但を。猶大将軍斯のごとの。赤心を関し。所と。許容なるに。明日城中へ大将軍の。為を恨さとい入り。砂漠の陣穢とりて陣中の労を慰し。奉らん迄。嫌疑の時節に。城中へ食糧の為。官軍の歩卒百人を注ぎ。手勝の軍勢に。悉く柵外へ出し。べくして。純素達で言上さの有宜しく。大将軍人数露顕を。なると。陽儀もなげに。深く。加藤重光勢と。一伍一什と。関案と。心に十分の怒り。成生ず。海好賊逆威を。表ひ。四百月代を。退落し。就ひ。新害して。南海西海。とどの為に騒動。春くも。家の為。宸襟を悩し。既に。追捕使を度に。あるべき。是併なるべう。集第兄弟が。悪逆に。同じ。あり。鎮に。今更。光邦を。海に。暴に。和を。乞心を。得び。参に。為に。陣中の。容を。兄弟為の。坐を。去らせば。討果さんと。既に。太刀の。柄へ。手を。懸らし。又思ひ

逸せもう。何へ兎もあと大將軍へ言上せばして計らへ。全く藤忍の至り。山下和成
はて計らへべしと。故意と面て和らげて居る處最あり。是より直さま大將軍へ。その
より異ふ言上仕。逆賊とまう仕べしと。暫くと目して待ゐへて。會釈なしく出
居るふ心利いる郎等ふ。渠い大切の者ゆえ。必ず拔逆せとあるべと。嚴重ふ密語
示して頓て大將滿仲の門前ふ至りて使者の來給。且純素ゞに從の極き逆一
微細ふ演終り。人も无多る敵の計らひ。直ふ対果さんと存ぜしと。光山元綱を
窺ひて。逆ふとそ計らへめと。其修ふきーあいい門縛しくこの処へ引の上參りひん
やと。最丈高ふつく言ーはまで。滿仲と直成関係のひて荒示とうも矢ふ慢
居くも巧こーよる。吾その使者ふ對面して真逆辯を多ゑ目べ。この所へ溜ひ
ぜまと。縛ゆあげふ宣ふ成加藤ふ固ようその座の人。如何ある賢慮のまーまま
やらんと。不審晴わど上意ゆとべかゝ藤い陣所へ立帰り。燒山元綱ふ演流ゆ。

重光自ら案内して滿仲ゲ門前へ出る。燒山逆ふ低頭しく。その山元綱逆成
候ふ処ふ滿仲小膝を進めのひ。燒山とやらん近う来と。寄ゑの陣へ使者とて
只一人參ること。汝も異淵の城内ふて。三の剛の者と覺ゆるぞ。清純素ゞに從の
頼き。兼ゆる処逆くふ。その道理分明ゆう。後て斯こそゑべけまと。我ゆ粗
思ひ居う。然まどもこのあと年。頼りふ逆威を拳動て民の困苦いゝ
更ゆう。都鄙の騒動大りさゆうゝ孫べ。其皇軽きふゝ。ぼとゝ人。今怨地ふ
心を改め。過て悔て陸を全と。實ふ神妙ふ覺ゆまべ。遠ふ許容ゆ。明日城
中へ參るべし。羅改けくこのよう成具ふ傳へやべと。命ふ燒山守て平めて畏り
ひひねと言奉まうして退出べ。迎賓の居素門成ゆく。陣外まで送う
出ま。初め燒山この陣中へ使者とゝく来ふけゆ時。滿敵の高ふ一分を。把
るとゆあゝん家とその親族知音の者ゝ。後め服色ゝて立出ゆふ。


黒崎の城中謀
計を設て満仲
以下を饗應圖



まづ恙なく仕課せて。陣外へ出でべ。漸く獲生の恩ひ浅微して。城中へ馳
帰る。斯て加藤重光箕田の仕その除の老臣等にて掾へ純素が今宵の
使者。如何ぞも不審ぞ浅。君軽く考く許容まじく。明日城中へおん入あらん
と。命遣へさまと賢慮のなど。臣等が愚案ぞ及ぶべ。如何ぞるおん計らひ
ぞいやと言ーはるとば満仲い荒示とーく命する毒う。渠謀計をめて欺き
寄せ。或ひい陷阱欲伏兵欲不意を撃んとするその結構賞を掲げ如。渠
恕ひぞ拙謀をりを我を欺んとするぞう。却て渠死地ぞ入さう純素を討て
黒湯の城落去せんぞ明日ぞあり。明朝既ぞ城中の兵をして。柵外ぞ出を時
箕田い四万騎兵ぞ将として。彼軍と對陣すべ。斯て我い逞兵を勝り。百騎を
供ーく城ぞ入るべ。勿論城門ぞ止まる歩卒。百人とりぞ宮めく肱股の
郎黨さーん。備餐夜明の頃重光前後を見計らひ。陣く設所この檐へ

火を狭むべ。低而大乱交くーる時城兵その火を消ぐんとを急ぐ所を押絡て。
こる逃こぞ新捨べ。當下柵外の兵燈を見て城へ入りんとすべければ箕田へ
四万騎兵を下知をして。一人も入をべくべ其間ぞ城将ぞ。純素を討取をーと。
未然を期して宜ひるとば。箕田が藤を始めとして揆を打て感激を雲
進んで明ろ夜深かくて其翌の月い天慶四年三月十二日ぞ。城中の兵
三万騎。伊賀寿太郎總大将として大ぞの城ぞよう除く出て南のふのふ
惟暴流漫ー。隊伍乱れさべ陣ーけをべ出方ぞも箕田の仕四万六千の兵を
率て大ぞの外ぞ屯す。伊賀寿太郎い是を視て名ぞ人箕田の仕ぞ
陣ぞ止まるくん。如何ぞ計策をも設めくんと。要ぞ油断ぞせざうけ。兎かく
する程ぞその日も夜午の刻ぞ迫づれをべ大将左馬助満仲へ赤地の錦の
澄直垂ぞ前莫匂ひの腹巻を着ー。夜冠り製ひて月毛の馬ぞ金覆輪の

鞍おろせそで糸のハト部勘解由次官ハ金作の太刀を持て大将のたゝ[illegible]添。
其身も大紋の下ゝ腹巻を着さうけ。其後兵衛尉重光始め一騎当千の名
誉あり。源家恩顧の兵卒衣の下ゝ腹巻を着て大将の前後左右を固む。
大ゝの城戸口まで打寄ゝ城将権亮純素ハ大紋ゝ烏帽子を着く一の
関まで出迎ひ客位ゝ請ゝ奉り。膝行稽首ゝく這回の罪責を謝する。
昨夜焼ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ膳を設け。餐[illegible]ゝ[illegible]ゝ。
献酌ゝ巡ゝ下りて頗る酩酊を彰ゝて新ゝ。年の程十七八九二十ゝ満ざる
美妓の。[illegible]ゝ綾羅を纏ひ紅粉を施ふその形粧。雲花の面ひ柳眉閑よと。
遍顧ゝ眺ゝ。五節の舞妓ハいのものさゝ[illegible]。瑤台月下の神仙の家と
疑ふ半ばの美女十四五人出現と仕り。或ひハ謳歌舞曲を奏す。その声玲
瓏ゝく心耳を洗ふ。佛の出現ゝ[illegible]ゝ迦陵頻伽も斯ゝらんと。その

情既ゝ濃やゝ[illegible]。折ゝ加藤重光ハ座上ゝ立て外面ゝ出。光陰[illegible]
[illegible]ゝ迎ゝ。時分ハ善ゝと心ゝ点頭。城中ゝ陥阱[illegible]。
[illegible]ゝ[illegible]ゝ恩ゝ[illegible]ゝ怪ゝ[illegible]ゝ不審ゝ[illegible]。
波方出方[illegible]ゝ中門の渦の方ゝ。
見ゝ[illegible]ゝ。この折ゝ怪ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ。板の間の見元
[illegible]ゝ備ゝ菱ゝ[illegible]ゝ。武ひハ兵[illegible]ゝ。大地ゝ耳ゝ[illegible]。
雲時[illegible]ゝ折ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。
物[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。
ハの石ゝ累ゝ。ゝ[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。
[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。
[illegible]ゝ。元の座ゝ着ゝ。下[illegible]ゝ。[illegible]ゝ。味方の[illegible]ゝ。

駒を走らしめ。是軽共に心得て。五人三人接くみ下様にて立出て。陣屋の庇
雨樋の狭間。その他便りに任せ。大弦狭き所にて。折しも吹き来る渓風に
火の内こと燃揚る。城中百人の雷音と成て。周章て漸く撲消す処に。
まく此処彼処より燃出るべき。遠の什器如何せん。周章惑ひて。水よ水よと
立騒ぐ。満仲以下の人々。組子の踏ぎの関男。更に不知顧りもせず。
盛の隙迷を繰るぞ。哀れ。満仲。紙素が打ひ。今日の出張敵待ち受。怨
地軍旅の苦情を忘るが如く。覚へず。日の闌るを暇やさん。まく童れて見
参せんと。宣ひけるに紙素が相図の伏を合朝せば。心得に愛へ問て出発の用
耳に。人らば不興気に。と立て。奥へ入らんとしも。折柄大将満仲が後の
方に控へ居たる。田井十郎正治。烏帽子も取あへず。駆寄て。墓地に花を
出大将権亮紙素が大敵の組。

遂る。まく人倫の穢部なる。高直もせば奥へ入る。尾終なり失敗なり。去来
世方へと。引立る。紙心得ると。紙素が田井正治が腕を撓へく。捻倒さん
と。紙正治遂に身。紙況まく。紙素が豆弦掛ひ。矢庭に足へ
引倒る。元来紙素大剛の人。正治が如きに敵なくも。組伏らく者なられど。
天運とて。場の所。大敵の組。操て。その働き自在なる。墓なく組を
ふり。正治忽地刀を抜く。紙素が首捻落し。度掠の働を。城の大将
紙素を田井正治討取ると。高らに喚り。首を太刀の先へ貫ぬいて。
用ると高く掲上れば。敵無数に。紙況て。呆然る計りなり

第九 伊賀寿太郎が往方
附 紙友宰府落紙正最期

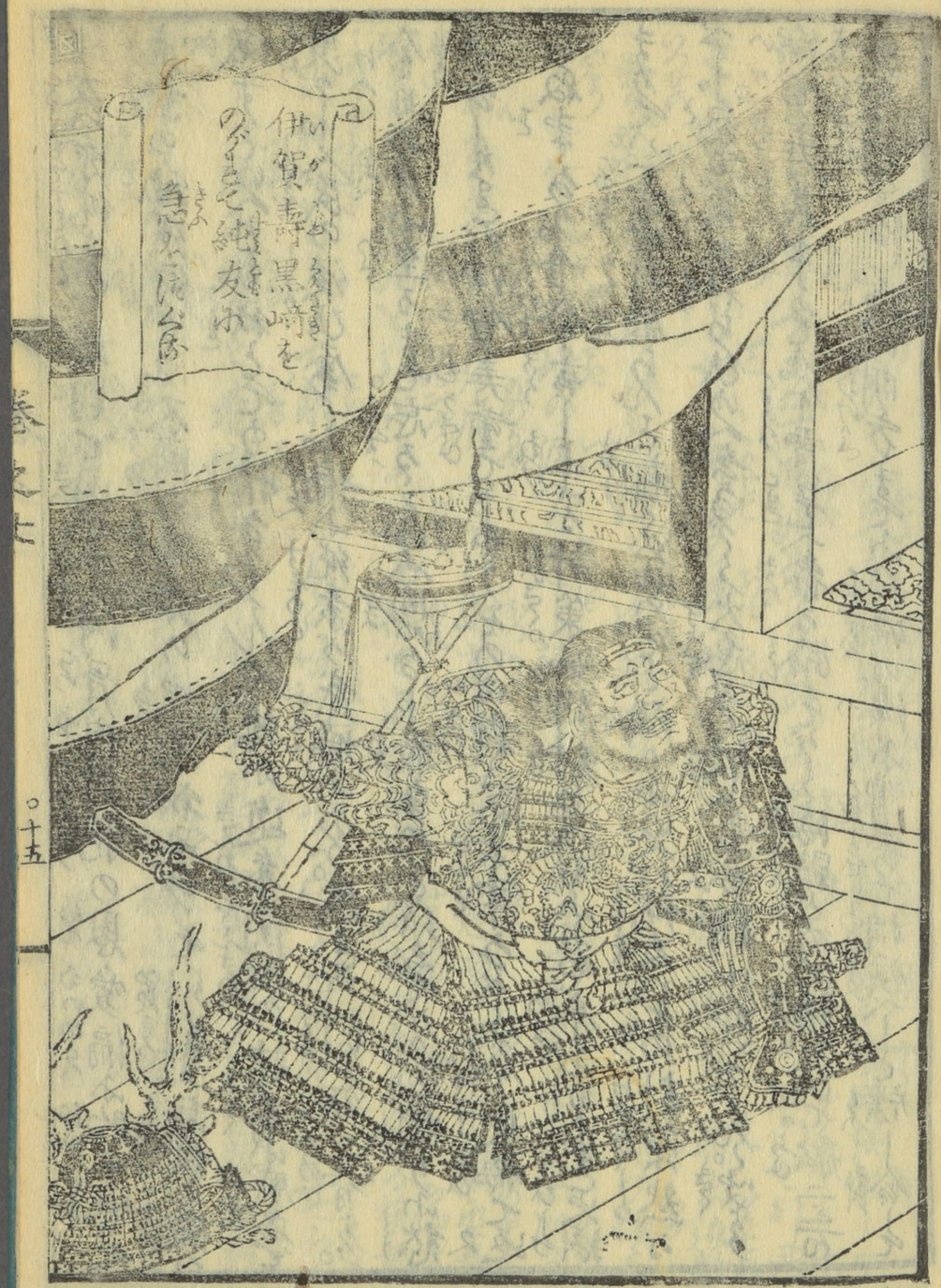
当下伊賀寿太郎。敵兵に将ぐ。柵外に陣を張。遂の心に在けり。

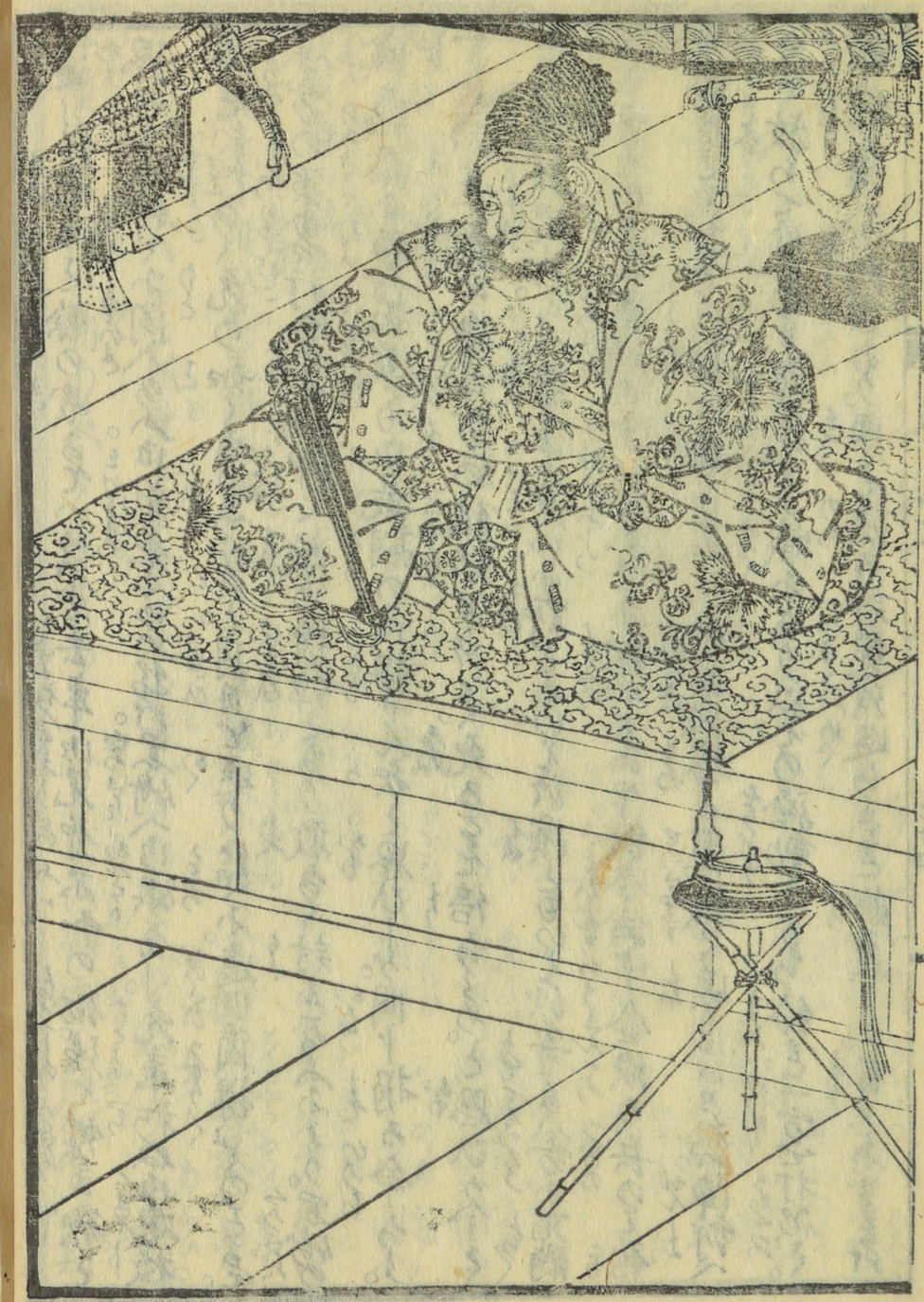
不図城の方にて鬨の声聞えて猛火城に燃揚り。黒煙門に揺へ霞ひ掛りて見
るに。驚波武軍の起りぬる。直に城中へ引入ると。下知伝へて諸軍勢城へ入んと
すること。其間の仕も煙を視て暴に四方騒動の色を進め。伊賀寿が城へ入ん
とする程。猛勢迫く寄つけて入る。ずと挑を戦ふ折から。同井の西海へ大勇の
高楯のうち警り。大力の猪に貫き。紙素が首級を捕出して。味方の人々
関の人に大将に悪く。この城中に在まるべ心易く思つるべ。敵の大将紙素に
某が討取ると大音声に呼て。諸軍をどつと勇まざるん。一同に声を揚て
鯨波を作て紙関よう。力落腕疲て戦ふべ死義
鯨も多く。日来に増も特無く。死生紙雲ひ軍兵さん。落支度を敢すべ。
況て鳥合の兵どもに逆豆出して逃る程に。或ひは敵に押結られ。敵なく首
級をとられるもあり。右往左往に敗北する。伊賀寿太郎も今いかに。見る

ありと思ひ。武天寺の別の大あり。真甲に騎して勝鬨つる。敵の中へ
金釵を割て入り。当る紙儀倖打倒し。或ひは三刎車切或ひは薙伏切伏て。
瞬間に数多の敵を切て落しうりけ。程に早り切る源軍も。伊賀寿一人に
撓り立られ。通りて四途路に。敢て近寄るものも。夫義紙俄に
教くに。遠矢を射うけ。伊賀寿熟思ふやう。大将既に討死の人。何時
迄此処に戦ふも。其切絶てあるべ。まと討死紙素とて。墨の命と
捨ると。ひとまず宰府へ立帰て紙友に。容を改め。後の戦に討死
すべと。思ひ返して。ふの方へ漸と。引あげて頓て敵の勢に。うち交り。一騎の
血路城求る。駆出に。敵場で。宰府を分て地うけるさ。の逆物ありと
人ども。大剛の力士に責付られ。竟に。敗軍に。側ると。遠
見て日来の早走り。この時に。とそと身構て。鬼が如くに。地てゆく。見る湯

宰府まではハ行程二十里に除りぬる故。三日の酉の刻。黒結須打立て。その暁
寅の刻ごろ既に宰府へ着になり。かくて四方を見するに宰府の寄手ハ小野好
古經基王の両大将その勢凡千ハ計りあらましバ方三四里が間ハ雑兵充る
地もなきまでに陣を取布て構えぞ勝しかどりなへりと。然れバ伊賀寿ハ此
城へ輙く入べきの城なくて。種々思ひ廻らしけるが。俄と沈吟するとありて頓て火縄
なりし。大なる近き陣所の樹へ火縄を結りなせバ。折しも暁方の深風にて火ハ燦に
燃あがり。炎ハ八方へ飛散ぬれバ。さしも驚破失火ぞと騒ぎ立火縄撲消さんと焦く間に。
伊賀寿ハ難なく城へ入り。頓て大将純友が前へ出されけるに去年兄弟不和の
節。純素に従ひて黒縛の城へ赴きしが。其後更に参らざりして今暁暴に寄り
来しハ純友ハとまれ見て要ありなんに来りしかと。其の斗りの会釈せ
伊賀寿も稼て斯あるべしと思ふものから心に関バ傍近く座を去りて斯

遠しく参りしを除の表あれハゆかず。去年にハ兄弟不和の砌にて嫌ま御と
思ひしが。御弁く不図への心ま紀と。無を見ゆるに黒縛へ御供なし元来おね御遠枝
なれバ推参なく元の如くならんと月日を送りし処に。境四箇操くのさへ
味方の軍略行なはれ。却て敵の僥倖となり。敢なく討れなれバより。黒縛の
城落荒に及びぬ。其も御最期の御供せんかと思ひしが閣下捐る命なる。
一元に一箭にあり。一方の補佐をもなく死るこそ倍なれと思ひ入く
其の場を逃去りて参らで見ゆれ野とあり。ゑバ濱とありゑバ寄る八方に充満
する亦其の上に黒縛の寄手不日に馳加りゃ。假令城中金湯の兵の範
するとも。なかく防ぎ難かるべし。今是へ参る節。輙く逃りなれバ陣所へ
火を放ちてゆかが。あま御覧ぜよ。城に在りぬ其騒動にて味方一方を打破
補縛の津へ向きあり。而して後の計策を巡らさまく然るべしと言しになまバ


伊賀壽黒崎を
のがれ給ふ紀友ゆ
急ぎ給へ



純友へ弟純素が最期を聞て不得骨肉同胞の恩愛偏に胸に迫りて
直衣の袖絞りて不図も兄弟の中不和にありて別れ胡越の隔
做すこゝろなれども我とても情なくうんや殊に近年関西の諸国に威を
裏くに人民の疲ひ苦と偏に純素が武徳にあり然るに其日より
今日の夕に至るまで忘るゝ間へるに敢なく死なんと頻りに愁
傷の一日なれば伊賀寿童丸中ゆうその比数き去事なくして今更悔て返
らぬ事なり唯今言一上る計策如何計らひのふゆゆ今ゆもあるに
まりて一方と打破らんと報くゆゆ頻りに純友へその計策然る
べし鬼も角も計らひ給へ去ぬるに火急なる船ども合期しかくうんと中より
伊賀寿其事あれば不用意へ乗る路まぐるに海賊どもを結らひて船二百
艘准備せし夜の明方までに箱崎の津に清盛て相淀へと牒し合て

ゆゆ心易かるべしと更に諸軍へ触て出る准備成ぬ
懐中の書状等に二百隻の船を一所に纜め城門を開
きて旋風の発する如く寄せの陣へ駆て入れば浪い猛火燃るり前の強敵
一撃に押蒐りさうければ陣を四途路にありけるに清盛や急と打懸け頼て
一言とうち破り箱崎の津へと志し諸軍馬を早めけるに寄せの同に降る
大軍なれば見る紙屑ともせず迫蒐ると甚だ急なり中に大蔵少輔春
実に千隻ばかりと卒して揉に揉で迫討ども純友が命令なる統前
四郎純正と云て敵と防ぐに味方危うくべしと二千隻ばかりを率て
返し二隊に備へて春実が千隻と蒐合せ命令情まる蒼撃突戦
矢種も尽る射尽くれば大刀長刀抜晃して縦横に突て廻る純正い隙て
よう今日を限りと覚悟せれば一足も退らじ自ら敵陣迫崩する七八

度ふ及びけり。純正げ其日の裝束ふ萠黄純ふの澄直衣れ紅の濃の澄の金張ゆて金物義く打さる弦。遠間もゆく着下し。銀の紙形打さる太刀甲の緒弦ふの。太く逞き馬ふ紅の。厚房懸て。ふさうさるとべ。行装いも光明ふ四色紙拝ゆく見えけるゆそ。月除の武者ふ月ゆうけそ。金純正と押取給に。音打取んと手ゆ程ふ。数度羅懸ふ及びけるとど。純正い些も脇まん。勇引凛くとて。国弦解。敵て八方へ迫散ゆ。紙りとゆども。数度の戦ひふ。草摺ふ。新落さると其身も。重疵弦。数多負ひ。且二千騎の軍兵も。大半討れうとべ。今ふ見まそとそ見えふけり。粤ふ伊賀寿ふ純友と。馬弦双べく。池せけりが。遥ゆく。後方弦見るふ。四郎純正の見えざるとべ。必定敵ふ取囲まれ。ひゆくんと其由弦。大将ふ言しーゆ。壽と迫て一散ふ。馳来りくとべ。素の如く純正い。多勢の敵ふ方。国まると。痛疵負ゆと見えけるとべ。ゆの

大方ふ弦見うして。純正弦国をる。多勢の後より。舎釈ゆく。破羅羅ると。羅ふこそ。さーゆ。勇き。純正弦有ゆけ。馬て跳らして。引き性びまく。諸軍勢。叢立て。打てかるとべ取て。久し。敵退けべ又馳する。斯の如くゆる。再三再四発ゲ如くふ池する。そ今ふ見まそとて。宮軍ゆ。敗て長逃せざりけるとべ。伊賀寿ふ頻りふ馬て池て。箱崎の津へ。走りける。見よりさて。純友い。箱崎の津へ馳着きて。海の面て見渡せべ。伊賀寿太郎が。語らひふ。周て。津く。浦く。の高船。賀船。三百除。艘。漏集めて。の所ふ控へさるとべ。そ見るとう。清寄せて。諸軍勢て。ふさうける。純友。船ふ。乗りて。後て。そ方ふ。純正ゆ。伊賀寿ふ。俱ふ見えざれべ。倘ゆ。対きゆ。ちうらんと。見心ゆ。ゆーゆべ。伊賀寿い。半生。死る。純正弦。有ふ。引け。蟇地ふ。馬て。発せ。池。来りしーゆ。丈と。見えうと。見りと。下りて。船ふ。有う

純忠城下へ火を放て。数多所の重傷を負て。眼を開てひらく兄純友をうち殺さるゝを見
ゝ。竟に空しくなりぬ。是を聞て純友が心細くなり。澄の純盛絞り
けるが。斯てあるべき時なり。純盛解きて清忠を軍勢を差遣るに。初めて
二万騎ありしかども八千騎も足ざるべし。斯ては何方へ寄るとも功を立んも
難かるべしとて。その注方をさんざめきて。海上に漂泊せり。

第三十　征西将軍進発　附　春實慶幸賊船焚

語に曰。人と闘て脅を撃のゝ全くの克を得ざるのゝ其咽喉を撃て勝を
得しかども好古経基の為将諸所の軍に打勝。宰府を清倶に没落しく。
九国や平定に及ぶくらんども。賊将前原彦次郎純友の行方を存命なるやうにて。箱
崎の津より。二百餘艘の船を集て且く海上に漂ひしが。津々浦々へ打上りて海

賊どもを捕ひ民屋閭家へ押入て。米穀金銀財物を奪ひ。如
妻孥周防の方へ引連れ。群盗蜂の如くに発り。民家清房を掠奪せ。国司代
制せれども。群盗大勢なるが故に。諸所の悩さ甚敷。遂に討死し。或ひは森へ
逃隠る。亦長門国の稲村平六景家純友の下知に守て長府の城に在て威を
振ひしが。南海巷く騒動ありて早馬を立てその注進しきりに来れば
重盛公郷義為。征西将軍を差下し。好古経基に力戦せ。賊徒の根を
断て葉を枯すの計策をなさしむべしとて。亦這国も参議右衛門督藤原忠文を
征西将軍を命じ下る。然るに忠文い宿所を常に天慶四年四月廿八日に
花洛を立ち。直に郷ふるの郷先達の東国の追討使をこそ。後の清盛が関
まで下向なるのひけるが。貞盛秀郷が武功に因て東国早くも鎮定し軍
旅へも至らざるに。路より返しぬ。諸国の武士ども

當方小屋さび果敢なくしきりあり。馳参るものもあり。摂津國渡部小
陣所敷て空しく日を送りける。但而淀橡掃部方の浦者所堀集め。且
兵糧軍資も。不日整ひとりなるべし。然らば今一軍しくその雌雄決せんと
須臾の月廿四日。千餘艘の兵船浮べ博多の津へと押寄せ。大将経基
出覧ずく。船武者の陸へ上らんとする。物の要れ立りのあるべし。故小如何ともせ
ず。賊共所陸へ上らんとする。計らんべくして。清の方二三町馬の足立ある程小殘
あれ。夏より引下り陣所立て。緩所振へ。清蒐さるべ。賊船洗こと糟者されど。
左右多くは陸へ上らば。是もさて緩て揃へて。敵くまで射ようける。陸へ上
あくまで上陸させんと呼引のこ。船をそいまさ如何ともして。船中人小漕ぎ出せんとその
計策を手すわども。果敢なくしき戦ひなく。遠矢小時て移せ。その賊船の内
より。屋竟の兵二三百騎小船四五艘小乗り。経基が先

陣匹田九郎が。三百騎を控へさる。真中へ蒐入く。要時挑を戦ひ。綱と引く
船小乗る。匹田が軍勢追蒐て。櫂を一返せと。浪打際まで押結まで。
故意と船所清へけて。是へ乗きとて呼引けり。何さま船小仰細やあらん。然と
お主等大将の。下知所厳小守りて。無怠小賊船へ乗ぬ。相引小引ける
わどもの。二三艘清寄せ。戦ふ。初小同。強きべの二百の金戦へ。双方
船合を量りて。果敢なくしき戦ひて。粤小大藏坐春實と。右衛門尉慶幸と。
空小謀し合せとして。博多の津所引て。箱崎小陣所へ。まづ小舟百廿
艘。艫と舳とを繋て。立く進退蒐引の便利所計り。清迫郷の在家を。
二十余艘小立所。積て。その月和所候所る。同月九日午の刻ころ。風
頭りを吹発ず。波清小山の如く小揚る。間て今月小軍所止め。賊船悉く
海上小。数千の艘をとして船所繋ぎ。甲冑ら箭を抱て。労き所想め居ら

春實慶幸
賊船を
焼討ふ

ける。恁而春實慶幸へ渠儲けらる日々とそ。彼百余十艘箱侍の漕ぎ寄せ声のそ
漕出せる風いまそりく荒吹て。舟へ水の泰の散水等一揺よりと揺下さること。
帆柳て城まふ至り。あらや舟も覆らん欲とす。易死心へ浪しとの人とも。賊軍を破ること
さらの一拳と心力を励水を揖取水諸力を添元潮紙割く漕投る。賊船迫く
ありふけり。當下安室又二帝尾員とのふ者。純友の船へ在けるを。何心なくを
ぞ漏の方紙見渡せば。彼春實慶幸の船此方を斗て漕寄るされども間ひ
遠けるを其を宣ふ見えるる猛ど。倘も敵の船へやと急ぎ純友の船へ乗り。如此と
あるべ出周心然るべくと言しける。折節純友船底へ寝て居らしゝ枕も揺げ。
そを宣めて長舟なる。稲村平六が船へ乗べし。渠長門を責磨けば頭巾らんと
言しる。そを聞ひあるべくとそ寝返りをしてまさ伏さる。此へ於て安室も。その
侍体を居らうける。是ぞ純友が天運のそへ盡べ元時節なる。斯て春実慶幸へ

思へ侍へ船底へ潜。頃て加の三十艘の。在家を毀ち積らる船へ悉く火紙
放てぶさ。ものの暴風へ吹あらる。猛火燃へ燃ち遍る。
船へ矢ようも尚早く流を注て賊船へ打つるるとと見ると等一揺揺の猛屋
形の軒式ひへ帆柱綱一面へ吐と燃付て。炎十方へ飛散るゆどへ。賊等を
周章惶怖て火紙消んと歩めけども。元来暴風吹頻りて。此処を撲消せば彼
処へ燃付。千艘損傷合る。船へ悪く猛火と成る。然へとそ船を漕除て避んとすれ
ど数多なる。漕で繋ぎ間さるべ。左右へ漕出さるべ。逃まんとするへ漕こる。
海原より外へ路もなく。或ひへ猛火へ焼燃もて或ひへ海へ身を投ぐく。底へ
水屑となるも多く。此時へ至りく賊の軍勢。船へ乗りへ十へ二三。その船へ乗て
水火の為へ命へ失ふ累勢へ。そ阿鼻大城の罪人へ。十悪へ逆へ責られく。
熱湯の底へ沉をけんも。斯やと見えて涙湧き。然へ賊将純友へ船へ不測へ

この火炎逃まーくべ。衆てさーて漕ぎ行くう。実ふこの日の奇計ふ於てい右衛門射慶幸と。大蔵坐春實ゞ。肺肝ゝう出しー所ふく。後世源九郎義経ゞ風波て厭ひぞ鎖波へうさう。屋嶋の内裡ふ錦りくる。平氏と海へ逃下ーくる。その働きふ競まべ。京今同日の功績ゞり

平將門退治圖會 七終